

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730655

研究課題名(和文)「専門職の学習共同体」としての学校に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Basic Study of Schools as Professional Learning Communities

研究代表者

織田 泰幸(Oda, Yasuyuki)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：40441498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、北米における「専門職の学習共同体」としての学校の特徴を明らかにすることである。本研究の成果は、以下の3点である。第一に「専門職の学習共同体」の先駆的な研究の特徴および意義と課題を明らかにした。第二に、「専門職の学習共同体」の基盤的研究(「同僚性」の研究、「教師の職場」研究、「教授・学習の文脈」に関する研究)の特徴を明らかにした。第三に、テキサス州オースティン市における「専門職の学習共同体」の事例校の参与観察を通じて、その特徴の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine and demonstrate the characteristic of schools as professional learning communities in North America. To accomplish this purpose, I conducted 1. literature review of pioneering works of professional learning communities, 2. literature review of foundational works of professional learning communities(collegiality, teacher's workplace, contexts that matters for teaching & learning), 3. Case studies of professional learning communities in Austin TX. Based on these research examinations and results, theoretical significance and challenges about schools as professional learning communities are examined and demonstrated.

研究分野：教育経営

キーワード：専門職の学習共同体 校長

1. 研究開始当初の背景

現在の我が国の教育研究では、教育方法学を中心に「学びの共同体」としての学校の創造に関する議論が盛んに行われており、具体的な学校の事例が紹介され、実りある学校改革が実現されている(例えば、佐藤学の一連の書籍、福井大学教育地域科学部附属中学校研究会の書籍など)。一方、近年の欧米(特に北米)の学校経営研究に目を転じると、センゲ(Senge,P)の「学習する組織」論やウェンガー(Wenger,E)の「実践共同体」の知見を、教育学の研究成果を踏まえながら応用する文献が見られるようになっており、その中で学校を「専門職の学習共同体(professional learning community)」と理解する議論が台頭しつつある。

「専門職の学習共同体」とは、「生徒の学習を育むために、個人的・集合的な能力を高める継続的な努力に従事する、多くの共通の活動に関わる価値や目標を持った人々の集団である」(Leithwood et al., 2006)。この「専門職の学習共同体」は、単に個々の教師の学習に焦点をあてるだけでなく、1.専門職の学習、2.団結力のある集団の文脈、3.集合的な知識やスキル、4.対人関係におけるケアリングの倫理、に焦点をあてる点に特徴がある(Stoll & Louis, 2007)。近年の欧米(特に北米)の学校経営の研究と実践において、この「専門職の学習共同体」は、意義深い学校改善の戦略となりつつある。

申請者は、これまでにアメリカの学校改善の研究者ホード(Hord,S.)や、アメリカの教育社会学者ハーグリーブス(Hargreaves,A.)、カナダの教育経営学者レイスウッド(Leithwood,K.)らの議論に着目して、「専門職の学習共同体」に関する理論的検討を行ってきた(曾余田、織田、金川、森下, 2008; 織田 2011,2012)。そこで明らかになったのは、「専門職の学習共同体」の議論が、子どもの学び、教師の同僚性・協働性、授業研究(レッスン・スタディ)などに主眼を置いた従来の「学びの共同体」に関する議論を、学校全体での質の高い教育成果の追求、校長のリーダーシップ、アカウンタビリティの確立、学校の変革・改善のプロセス、学校の組織文化といった視点をより明確に意識して発展させていることである。

そのため、「専門職の学習共同体」をめぐる議論に注目することは、確かな学力の向上、学校の自主性・自律性の確立、アカウンタビリティの確立が求められている現在の我が国の学校経営の研究と実践に対して、意義深

い知見を提示できると考えられる。ただし、「専門職の学習共同体」は、北米において生まれた学校モデルであるため、我が国の学校経営実践の参考にするためには、まずは基礎的な作業として、その理論的・実践的な意義と課題を詳細に吟味する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、北米における「専門職の学習共同体」としての学校の特徴を明らかにすることである。具体的な到達目標は、「専門職の学習共同体」としての学校について、教育経営の組織論やリーダーシップ論の観点から理論的な位置づけと課題を明らかにすること、そして「専門職の学習共同体」としての学校の参与観察や校長への聞き取り調査をもとに、その学校の特徴やリーダーシップの在り様を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の方法は次の2つである。

- (1)「専門職の学習共同体」の先駆的な研究および基盤的な研究に関する文献研究を通じた、「専門職の学習共同体」としての学校に関する理論的検討。
- (2)「専門職の学習共同体」としての学校に関する事例研究。対象校はアメリカにおける「専門職の学習共同体」として高い成果を収めている学校(テキサス州オースティン市のミドルスクール2校)である。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の3点である。

- (1)文献研究として、「専門職の学習共同体」の先駆的な研究の特徴および意義と課題を明らかにした。具体的には、サウスウエスト教育開発研究所(SEDL)の研究チームの文献および「専門職の学習共同体」という概念の発案者であるホード(Hord,S.)とその研究仲間のトビア(Tobia,E)の文献に着目し、その特徴を明らかにしたうえで、意義と課題について考察を加えた。

SEDLの研究チームの文献は、「専門職の学習共同体」の次元(構成要素: 共有的・支援的なリーダーシップ、価値とビジョンの共有、集合的な学習と応用、個人の実践の共有、支援的な状態)と学校変革のフェーズ(局面: 開始-実施-定着)を組み合わせることで、「専門職の学習共同体」としての学校を創造・持続するための複数の評価・診断のツール(例: 「専門職の学習共同体」評価表、イノベーション配置図、専門職の教授・学習サ

イクル)を研究・開発しており、それらのツールから得られたデータや情報をもとに生徒の学習や学校変革の持続可能性を高めるための具体的な戦略(例:ビジョンが目に見える状態であることを確認する,組織の質としてリーダーシップを埋め込む)や行為(例:衝突や多様な意見が出た際にはビジョンに立ち返る,あらゆる機会を活用して職員と権限や責任を共有する)を提示するものであった。これらの特徴を概観したうえで、「専門職の学習共同体」を創造・持続するための評価・診断ツールの活用とかかわって、a.官僚制や共同体ではなく「学習する組織」を創造するために集合的な能力を高める刺激として活用する必要があること、b.シングルループ学習だけでなく、ダブルループ学習が必要になること、c.評価や測定については「外部の評価者のためのツールとみなして恐れるのではなく、学習者に役立つようなものに変えること」や「私たちはこれから何を学ぶことができるのか」という真摯な問いかけを大切にする必要があること、d.「対話」と「討論」の違いを明確に意識したうえで、それらのスキルを磨く必要があること、の重要性を指摘した。

ホードとトピアの文献は、教師たちが「単に会議で顔を合わせること」や「協働的に活動すること」を超えて、連続的な学校改善に取り組む真の「専門職の学習共同体」を実現するために、専門職の実践の連続性(孤立して働く 協力して計画するために顔を合わせる 秘訣・芸当・技術の共有 文献講読に取り組む 研究会に取り組む 真の「専門職の学習共同体」)を描き出している。彼女らの研究は「専門職の学習共同体」の現実的な可能性を追求するものであり、その理念や特徴だけでなく、教育の実践家たちが「専門職の学習共同体」を創造するための有益なツール(例:専門職の学習者の共同体の10ステップ活)を提示しており、それらのツールの活用を通じて学校の変革・改善を実現するための具体的な戦略や行為を含めて提示するものであった(例:専門職の学習共同体のためのイノベーション配置図)。これらの特徴を概観したうえで、彼女らの議論が、教師の専門職性に関する理解(「外から内へ」から「内から外へ」の見解の実現を目指すこと)、学校の成長・成熟(教師集団や学校組織の成長・成熟の度合いを表現するモデルを開発したこと)という観点が注目になることを指摘した。ただし、センゲの「学習する組織」論の観点からすれば、システム思考に関する

理解の課題(学校や教室だけでなく、学校を支援する保護者や地域社会との連携や協働にあまり関心が向いていないこと)や、ツールの活用方法の課題(「細目の複雑性」ではなく「ダイナミックな複雑性」に対処するツールの開発・活用の必要性)があることを指摘した。

第二に、同じく文献研究として、「専門職の学習共同体」の基盤的研究である、リトル(Judith W. Little)の「同僚性」の研究、ローゼンホルツ(Susan J. Rosenholtz)の「教師の職場」研究、マクロフリン(Milbrey W. McLaughlin)の「教授・学習の文脈」に関する研究の特徴を明らかにし、専門職の学習共同体の観点から、その意義と課題について考察を加えた。

リトルの「同僚性」に関する研究は、成功を収める学校の教師集団の相互作用の特徴(範囲、場面、頻度、焦点と具体性、適切性、互惠関係、包括性)を明らかにし、概念的に無定形な同僚性の形態(a.話しかける・ざっと見る、b.手伝う・援助する、c.共有する、d.共同活動)を明確にし、イデオロギー的に楽天的な同僚性の可能性と限界(a~cに限定された同僚性は個人主義・現状維持・保守主義の文化を維持・強化するに過ぎず、dが最も意義深い改善を導く協働的な活動・文化であることを)を指摘し、「協働文化を育む学校」を支援するための環境(例:共通の関心と目的、機会、資源)を構築することの重要性を指摘するものであった。

ローゼンホルツの「教師の職場」研究は、成功を収める学校の特徴(a.合意の高い学校、b.協働的な学校、c.学習豊富な学校、d.非ルーティン技術文化の学校、e.動きのある学校)を描き出すことを通じて、教師の職場の要因(例:学校組織における対人関係や構造的な状況)がティーチングの質(例:教師が生徒たちに与えるインパクト)に影響を持つことを明らかにするものであった。

マクロフリンらの「教授・学習の文脈」に関する研究は、「今日の生徒たち」に対する教師たちの適応の幅広い様式(a.伝統的な実践を維持・強化する、b.期待を低める、c.実践を変革する)を明らかにし、最も効果的な適応を実現できた教師たちに共通するのは「専門職の共同体」(cのタイプ)への所属であることを明らかにした。そのうえで、「専門職の共同体」としての教授・学習を取り巻く様々なレベルの重層的な学校文脈(教室、教科領域、学校組織、学校システム、保護者・地域社会、高等教育制度、専門職的文脈、環

境)として「強力な専門職の共同体」を構築することが、教師の効力感や専門職的な成長と学習をもたらし、結果として教授・学習の改善および生徒に対する支援と成功をもたらすことを実証した。

第三に、テキサス州オースティン市における「専門職の学習共同体」の事例校であるミドルスクール(2校)において、参与観察および校長や教職員への聞き取り調査を通じて、その特徴や実態の一端を明らかにした(2014年3月訪問)。これらの学校では、教科や学年レベルだけでなく学校全体での教育活動の連続的な改善に取り組んでいること、校長の卓越したリーダーシップが発揮されていること、主に州の学力テストの結果を基礎とした成果(結果)志向であること、などが明らかになった。なお、同時期にオースティン市の SEDL を訪問して、研究資料を収集するとともに、ホードとトピアに対する聞き取り調査を通じて、「専門職の学習共同体」の基礎的な理念や支援ツールについての理解を深めることができた。

本研究を進める過程で、今後検討すべき先駆的な研究や基盤的な研究が、当初想定していたもの以外に複数あることが判明した。今後の継続研究において、それらの文献に注目してさらなる理論的な検討を進めていきたい。また研究代表者(織田)の体調不良により、2014年度に予定していた学校訪問が実現できておらず、事例研究および校長のリーダーシップについての検討が不十分なものとなった。今後の継続研究では、アメリカの様々な州や都市における事例校の参与観察や聞き取り調査を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(4) - Shirley M. Hord & Edward Tobia の研究に着目して」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』第66巻, 2015年, 343~358頁。査読無し

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(2) - ツールの活用をめぐって」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』第65巻, 2014年, 377~391頁。査読無し

織田泰幸「『専門職の学習共同体』として

の学校に関する基礎的研究(3) - ローゼンホルツ(Susan J. Rosenholtz)の「教師の職場」研究に注目して」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第59巻, 2013年, 109~114頁。査読無し

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(1) - リトル(Judith W. Little)の同僚性の研究に着目して」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第58巻, 2012年, 380~385頁。査読無し

〔学会発表〕(計 5 件)

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(5) - Milbrey W. McLaughlin の「教授・学習の文脈」に関する研究に注目して」中国四国教育学会第66回大会, 2014年11月15日(於: 広島大学)

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(4)」日本教育学会第73回大会, 2014年8月24日(於: 九州大学)

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(3) - ローゼンホルツ(Susan J. Rosenholtz)の「教師の職場」研究に注目して」中国四国教育学会第65回大会, 2013年11月20日(於: 高知工科大学)

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(2)」日本教育経営学会第53回大会, 2013年6月5日(於: 筑波大学)

織田泰幸「『専門職の学習共同体』としての学校に関する基礎的研究(1)」中国四国教育学会第64回大会, 2012年11月20日(於: 山口大学)

〔図書〕(計 1 件)

織田泰幸「教師が専門家として学び育つ学校を創造する - 専門職の学習共同体(Professional Learning Community)」多田孝志・和井田清司・佐々木幸寿(監修)『教育の今とこれからを読み解く 56 の視点』教育出版, 2015年。(印刷中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

織田 泰幸 (ODA, Yasuyuki)
三重大学・教育学部・准教授
研究者番号: 40441498